

山形 光弘（やまがた・みつひろ）

1、プロフィール

詩人。詩を中心に自由律俳句・一行詩・童話・評論などの分野に多彩な創作活動を行なったが、36歳で早世。

<生没>

1940(昭和 15)年4月 15 日 ~ 1977(昭和 52)年3月 17 日

<代表作>

詩「砂子瀬」「モジェリアニ」「秋に」「小さなローソクのような」、

評論「現代詩の風土と伝統」「詩と風土」

<青森との関わり>

弘前市出身。弘前大在学中に文芸クラブを結成し、同機関誌や県内紙に発表。卒業後も県内誌紙に発表を続ける。

2、作家解説

昭和 15 年南津軽郡大光寺村(現平賀町)で、父忠平、母りつの長男として生まれる。父忠平は教職にあったが、妻りつの影響で短歌結社「勁草」に入社。29 年には成田憲三らと津軽短歌社を結成し、中心となって活躍した。32 年弘前市に移住。

光弘は、小和森小、弘大附中、弘前高校を経て 34 年弘前大文理学部に入学。国文学を専攻。ここで、文芸クラブ「ゼフェルス会」をつくり、同人誌「弘大文芸」に詩「埋れる」「落下地点」「風のくれた絵」、創作「従妹」を発表。以後数年にわたって現代詩を東奥日報にも投稿、入選を重ねる。卒業後、旺文社に入社、39 年に弘前四中教諭となり、翌年4月弘前南高校教諭となる。同年青森県詩人協会入会。

42 年詩紙「あらばすた」に「道」を発表。44 年弘前中央高校へ転任。自由律俳句詩「鷹」や魚眠洞主宰の一行詩誌「視界」の同人となる。とくに「視界」には 18 号

から 81 号まで意欲的な作品(332 編)を山形燈鬼のペンネームで発表し続けた。同年9月『弘前大学国語国文学』第2号に論文「待つ心のかたち―式内親王の家集について―」を発表、「評論家としての稟質をしめした力作である。」と評された。45 年「視界」29 号にエッセイ「感動から衝撃へ」を発表。同年5月、詩誌「ふらんぼ」同人となり、その創刊号に代表作となった長詩「砂子瀬」を発表。46 年「視界」36・37 号に主論文「前衛俳句の可能性」を発表。7月には県児童文学研究会第1回創作童話コンテストに「やまめになった少女」が入選。47 年7月県詩人連盟に入会。49 年、地方紙に詩論「天災と狂気―ガルシンについてのノート―」を発表。同年 10 月、詩誌「弘前詩人」の同人となり、その創刊号に「モジェリアニ」を発表。52 年、心不全にて永眠。「短い期間に驚く程多彩な活躍を見せた彼は、自らの心の中に交錯する光と陰を、前者は詩や童話に、後者は一行詩へ、投影し作品化していたように思われる。」(猿不次男「視界」118 号)

3、資料紹介

○『山形光弘詩集』

図書

1977(昭和 52)年 11 月 10 日

213mm×150mm

没後、『弘前詩人』の同人を中心とした6名が編集委員となって刊行。内容は、詩 30 篇と一行詩 24 篇と「現代詩の風土と伝統」「詩と風土」の評論から成る。他に、「弘前詩人」10 号(追悼)、「視界」118 号(燈鬼特集)がある。